
かみさまといっしょ

銀丈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみさまといっしょ

【Nコード】

N1780Z

【作者名】

銀丈

【あらすじ】

祖母が危篤との報せに、両親と共に祖母の住む山奥の神社を訪ねた琢磨。祖母にひとりぼっちを強いた「神」への怒りを抱く彼に、祖母は言った。

「神様を頼んだよ」

複雑な思いで遺言を受け取った琢磨の前に、本当に神様が顕れた。

ちよつとだけ大胆な女性や悪い人が出てくるためR15

序／お社へ

祖母が危篤。

急な報せを、源琢磨は走り出した車の中で聞いた。

しかもその祖母が、床に伏せりながら琢磨を呼んでいるのだという。

放課のチャイムが鳴った直後の高校正門へ車で乗り付けて、出てきた男子生徒を車内へ引きずり込むなり走り出す。両親が一人息子にやらかしたとはいえどう考えても通報沙汰の手際も、事情を聞いてしまえば文句は出なかった。

とはいえ、もう少し現状を把握したかった琢磨は、アクセルペダルを踏みっぱなしの鬼気迫る父ではなく、同じ後部座席で隣に座っている蒼ざめた顔の母に訊いてみた。

「母さん、おばあちゃんそんなに悪いのか？」

「元々山奥に独りで暮らしていたし、体を壊しても、どうしてもってお社を離れなかったからね。お医者さんが診に来たときにはもう、随分ひどい状態だったらしいわ」

琢磨の脳裏に、寂れきった神社の境内で竹箒を片手に笑う祖母の姿が浮かんだ。

琢磨の祖母は、琢磨が物心つく前にダム湖に沈んだ父の故郷、源村で巫女をしていた。

村がダム湖に沈んでなくなり、人が方々へ散っていく中、祖母は『神様が寂しがるから』と独りダム湖のほとりへ移設された神社に残ったのだ。

幼い頃、夏休み冬休みが来るたびそこへ帰省しては遊んでもらっていたが、しばらく会わないうちにこんな報せがあるとは思ってもなかった。

「何が神だ」

行く手を見据えたまま、琢磨の父の押し殺した低い声が車内にこ

ぼれた。

「何度も一緒に暮らそうと誘ったのに……ありもしないもののため
に何やってるんだ……！」

そうだ、と琢磨も自分の心がささくれ立っていくのを感じた。

いい歳をした大の男として口に出す気こそないものの、使い捨てる
のカイロを捨てるときさえありがたうと感謝して、使わないのに手
元に置かれる道具はかわいそうだ、と持ち物にスペアを用意しない、
そんな優し過ぎる祖母を、琢磨は大好きだった。

祖母の優しさを振り回し、ひとりぼっちで暮らさせ弱らせるよう
な理屈は絶対に間違っている。

それが神だというのなら、神なんてもの、いてたまるものか。

吉ノ神様がみてる(前書き)

20111213

サブタイトルのみ修正

吉ノ神様がみてる

1 - 1

一晩ほぼノンストップで走り続けた昼下がり、ダム湖のほとりの神社に着いた琢磨と両親を出迎えたのは、白衣を着た男女二人組だった。

「源さんの息子さん方ですね　後藤です」

ジャケット代わりに白衣を羽織り、首には聴診器、といかにも町医者といった風情の小柄な初老の男が、琢磨の父に白髪交じりの頭を下げる。

「……カナハ」

飾り気のない服にやはり白衣を羽織った長身の若い女が無表情のまま目を伏せ、かすかな会釈と共に名乗る。

琢磨は思わず女を凝視してしまっていた。美形だ、というのが第一だが、その跳ね気味の短い髪は銀色で、眼は深い青色、明らかに日本人の造作ではない。

その視線に気付いたらしく、琢磨の父を案内しかけた後藤が琢磨に声をかけた。

「遠い国から、勉強に来ているそうだよ」

「そうなんですか」

「そう」

琢磨の相槌に本人がうなずき、一瞥いちへつだけ投げて後藤と共に琢磨の脇を抜けていく。話はふくらまないが、かといって関わりを拒絶するようなトゲも感じない。どうやら、大変にシンプルな人柄らしい。「こちらです、といってもご存知だとは思いますが」

案内された先の和室で、年老いた女性が床にしていた。

「母さん」

「お義母さん」

「おばあちゃん！」

口々に呼ばれ、彼女はうつすらと目を開けた。

「ああ……鍊磨れんまに、朱鷺とぎえ絵さん。それに
すうつと笑みの形に目が細まる。」

「琢磨。来てくれて……ありがとうね」

1 - 2

「おばあちゃん」

つぶやきながら祖母の傍らに腰を下ろしたきり、琢磨は口を開く
ことができずにいた。

素人目に見ても、弱っている。穏やかな笑みをたたえた表情はそ
のままだが、記憶の中の祖母は立ち姿ばかりで、こうして上体さえ
起こさず横になっている姿はほとんど覚えていない。雰囲気そのも
のにももつと張りがあつた。

横になつたまま、祖母は穏やかな眼で琢磨を見つめている。

祖母の容態を詳しく訊くため、両親は後藤や力ナハと共に離れた
部屋へ去り、今この場には琢磨と祖母の二人きりだ。

沈黙に耐えきれず、琢磨は口を開いた。

「おばあちゃん……元気だった？」

元気なわけがない。そうであればこうして呼ばれることなどなか
つたのだ。

気まずそうな琢磨に、祖母はころころと笑い、そして咳せき込んだ。
乾いた咳の弾みで上体が起きる。

「おばあちゃん！」

思わず腰を浮かした琢磨を手で制する、が琢磨は構わずその体を
支え、背中をさすつた。そして気まずそうな琢磨の表情が渋みを増
す。どうしようもなく、祖母が軽く、そして小さく感じたのだ。

「元気だよ。……大きくなつたねえ、琢磨」

「最後に遊びに行ったの、中1の夏休みだったっけ。オレもう高校
生だぜ」

語尾が途切れる。小さな祖母の手が、寄り添っている琢磨の頭を

なでていた。

思春期真っ盛り、いつぱしの男を気取りたい身としては照れくさいことこの上なかったが、祖母をむげにできず、人の目もないので、しぶしぶされるままにいる。

「ねえ、琢磨」

呼ばれて目を向けたものの、琢磨は思わず口をつぐみ返事をしそびれてしまった。祖母の眼はいつになく真剣な色を帯びていたのだ。「ひとつ、頼みがあるんだよ」

「頼み？」

「私の後を継いでほしい」

「……え？」

「私のいなくなった後は、琢磨が神様をお祀り^{まつ}してほしいんだ」「後を継ぐ？ お祀り？」

空白。言われたことがいまいちよくわからない。それでも、祖母の言葉は続く。

「もうすぐ、琢磨や錬磨、朱鷺絵さんとはお別れだ。そうしたら、このお社もなくなってしまっただろう。だからその前に、御神体を琢磨が持つて行ってほしい」

「ちょっと……ちょっと待てよ、おばあちゃん」

頼みの内容が頭の中にしみこむにつれて、琢磨の体に熱が湧き上がる。紛れもない、それは怒りだ。

「オレ、おばあちゃんの言うことなら何だって聞く。でも、それだけはいやだ」

「琢磨？」

「おばあちゃん、神様をお祀りするためにここですつとひとりぼっちで暮らしてたじゃないか。オレだけじゃない、父さんや母さんともあんまり会えずにさ。それで今、おばあちゃんがこんだけ弱ってるんだろ。それって結局、神様がおばあちゃんをこんな目にあわせてたんじゃないか。違うかよ」

祖母の肩に回した腕がかたくこわばる。目を合わせないまま琢磨

は言葉を続けた。

「オレ、おばあちゃんを苦しめたものを大事になんて思えない。父さんに相談すればいいじゃないか」

思わず祖母を睨んでしまいそうだった。祖母の大事なものよりも、自分にとっては祖母自身の方が大切なのだ。祖母の生き様を否定して、祖母を傷つけている自覚はある。それでも、これを譲る気はなかった。

「琢磨、本当に優しい……立派になったねえ」

穏やかな声に、祖母を否定して自己嫌悪に陥っていた琢磨は顔を上げた。

声色そのままに、祖母は確かに笑っていた。

「違うよ、琢磨。私はひとりぼっちなんかじゃなかった。それに、これは琢磨にしか頼めないんだ」

「オレにしか？」

「錬磨も、朱鷺絵さんも、神様を知らない。でも琢磨、お前は神様と会ったことがあるんだよ」

「なんだよ、それ……」

「一気に話して、疲れてしまったよ。寝かせてくれるかい」

「あ、ああ」

祖母をそつと横たえ、琢磨は改めて布団の横に腰を下ろした。ふう、と長めのため息をつき、祖母が琢磨に目を向ける。

「琢磨、錬磨たちを呼んできておくれ。なるべく、急いでね」

「わかった」

祖母が人を急かすことは滅多にない。余計な口をはさまず、琢磨は部屋を後にした。

1 - 3

さつきまでの弱った様子が嘘のように、祖母は琢磨の両親それぞれと話し込み、話を終えると、また起こしていた上体を横たえ、ふう、と長いため息をついた。

「あと、琢磨」

「なんだい、おばあちゃん」

「頼んだよ」

「……わかったよ」

気持ちの整理などつかないし、何をすればいいのかもよくわからない。だが、イヤだ、とは言えなかった。

琢磨の返事に満足げにうなずくと、祖母は目を閉じた。

「錬磨、朱鷺絵さん、琢磨、後藤さん、カナハさん、……みんな、ありがとうね」

ふうふう……と長い長いため息の中、祖母の全身から力が抜けていく。

そして、祖母は二度と息を吸わなかった。

1 - 4

月明かりの下、琢磨は本殿の陰に腰を下ろしていた。

医者 of 二人は近くの町へ帰り、両親は葬儀の手配等を一通り済ませ、二人で話し込んでいる。

ただの高校生でしかない自分にやれることはなかった。

ゆるりと風が揺れ、神社を囲む森の木々が葉を鳴らす。

思ったより、涙は出なかった。ただその代わり、どうしようもなく気力が湧かない。きつと『心に穴が開いた』というのはこういう様を指すのだろう。

祖母のことはいくらでも思い出せる。しかし当の祖母がもういない、という事実を意識するたびに、思い出しても浮かび上がる暖かな感情がどこかへ吸い込まれ色を失っていく。

「ひとりぼっちなんかじゃなかったって……まるで誰かが……」

いたみたいじゃないか、とつぶやきかけて、ふと考え込む。そういえば、幼い頃、両親に連れられて帰省するたびに、この境内や周囲の山の中で祖母以外の誰かと遊んだ気がする。

「……誰だ？」

その頃は深く考えもしなかったが、そもそもこの神社は山奥にある。ダムに沈んだ村から移設されたものだ。最寄の人里といえ、車で数時間かかるふもとの町くらいしかない。わざわざそんな遠くから、身内以外が訪ねてくるか？

確か……女だった気がする。長い黒髪で、そう、白衣に緋袴の巫女装束だった。祖母の落ち着いた色合いの和服と好対照だったので印象に残っていた。

名前は何と言っただろうか。結構短い響きで、漢字も教えてもらっていたはずだ。

「紗凜……だつたかな」

「媛か様を付けぬか。両方でもよいぞ」

「だが断る　は!?!」

息がかからんばかりの鼻先に、記憶どおりの顔。反射的にのけぞり、既にバランスを崩した状態で立ち上がろうとした拍子に、本殿の壁に後頭部を打ち付けてしまい、頭の中に火花が散った。

「おおおお……!」

頭を抱えながら転げまわる。痛い。これは大変痛い。頭上から、先ほどと同じ低女声アルトが聞こえた。

「なんとも、痛そうじゃな……大丈夫か？」

口調はともかく、綺麗な響きだ。

「大丈夫なわけねえだろ……じゃない、いつ現れたんだあんた」

「ぬしがわしの名を呼んだときよ。もつと早はやう呼んでもらいたかつたものだが、何にせよ久しいな、琢磨坊ほう」

腕組みと共に笑う、巫女装束に長い黒髪の美女。その両耳の上辺りからは鹿のそれに良く似た、枝分かれした一對の角が生えている。あからさまに人間離れした特徴に、遠い記憶にかかっていたもやが一気に晴れた。

そうだ、源琢磨はこのひとを知っている。そして、記憶の中の祖母は彼女を。

「神様」

そう呼んでいた。

貳／神様は風邪をひくか

2 - 1

「さて、球磨はどこだ？」

笑みも束の間、神様は真面目な顔で琢磨に訊いた。

源球磨。琢磨の祖母の名だ。

「おばあちゃんは……」

「そこか」

琢磨の視線を追って見当をつけたのか、返事を待たずに歩き出す。迷いのない足取りが、彼女が境内を把握していることを示していた。

「待てよ神様、おばあちゃんは、もう」

「知っておる」

置いてきぼりを食らいかけて小走りで追う琢磨の声に、足を止めず肩越しで応え、玄関を抜け、ふすまを開ける。明らかに慣れた様子で伸びた指がスイッチを捉え、部屋の中が明かりで照らし出された。

顔に白い布をかけられて布団に横たわる琢磨の祖母、その傍らに正座すると、神様は神妙な面持ちで手を合わせ、目を閉じた。

確かに彼女は普通の人間ではないのだろう。端正な横顔は十年以上前の記憶の中でややぼやけているもののほとんど変わっていない。「大儀だったな、球磨」

神様が、手を合わせるといふ、人の流儀で人の死を悼む^{いた}。その姿は琢磨にひどく複雑な思いを抱かせた。

神様のために独りここで暮らしていた祖母。少なくとも祖母は神様を恨んでいなかったし、神様も今こうして祖母の苦勞に報いた。祖母自身に遺恨があるとすれば、それは晴らされたことになる。

だが。ぐつ、と琢磨の手が拳に変わり、力がこもる。

今日祖母を亡くした、もし祖母が神様に関わっていなければもっと長生きできていたかもしれないという源琢磨の遺恨は、どこへ持

って行けばいいのだ。

琢磨の見つめる先で、神様が目を開き、振り返った。

「琢磨坊、球磨は何か言っておったか」

「……オレに神様を祀れってさ」

「そうか……その他には」

「おばあちゃんは神様を恨んでなかった。ひとりぼっちなんかじゃなかったって言った」

琢磨の答えに、神様は愁いうれを帯びた眼を琢磨の祖母に向けた。

「苦労をかけたのに、な」

「なあ、神様」

「なんじゃ」

改めて向けられた深い翠みどりの瞳を、見返す。

「お祀りするって、何をどうすればいいんだ？ もっと早くオレに代わっていれば、おばあちゃんは今もつと長生きできたのか？」

あんたのせいでおばあちゃんが今日死んだのか、と直接口に出しては訊けなかった。自分を幼い頃から知っているはずの相手を真っ向から切り捨てることまではできなかったのだ。

「ぬしは、わしが嫌いか？」

「なりそうで困ってるんだよ」

「そうか」

ふう、と息を継ぎ、居住まいを正すと、神様は琢磨を見つめなおした。琢磨もまた、その傍らに腰を下ろす。

「わしを忘れてくれるな。じゃが、もし憎いと思ったなら、そのまま忘れよ。それだけじゃ」

「どうということだよ」

「人のいないところに神はない。わしという神を願い『居る』と思う者がいるから、わしはここにおる」

「いると思っただから、いる？」

つぶやいて、琢磨ははっとした。さつき顔を合わせたとき、神様は『呼んだから現れた』と言っただけではないか。つまり、そのことを

言っていたのか？

「わしは人の願いだ。願われた在り方をわし自身が拒むことはできぬ。わしを悪しき存在として憎む者がいるとき、わしはそのとおりに悪しき神となってしまう。そして、そうできるのは源の村なき今」

「おばあちゃんとオレだけだった」

神様は小さくうなずいた。

「この身は、いつか誰かがこの地の天災に心があると思ったとき生じたものじゃ。わしが悪神となったときは、山をも崩す災禍が人に向かうことになる」

じゃから、と神様は自分の胸元に手を当てた。

「球磨はわしと共にわしの神威をこの地に留め続けることを選んだ。忘れれば無用な縁から解放され、かわいい孫とも暮らせようものを、球磨はわしの心を惜しんだのじゃ」

「おばあちゃん……」

祖母らしい。きっとそういう優しい選択は確かにあったのだろう。

「しかし、一つ誤算が出たの」

「誤算？」

「琢磨坊、ぬしじゃよ」

「オレ？」

「初めて逢ったときは、森の中で迷って泣いておったの」

か、と琢磨の耳が赤くなる。

「ちよ、茶化すなよ！」

「ふ、ふ、ふ。あれは全くの偶然でな、元々球磨にぬしをわしと引き合わせるつもりはなかったのだ。球磨の元まで送り届けて終わりのはずが、ぬしもぬしじゃ。味をしめたのか知らぬが、それから繰り返し山に踏み込んできおって」

言われて、一緒に山の中を駆け回った記憶が鮮明に蘇ってくる。

今になって思えば、神様と鬼ごっこだのカブトムシとりだの、雪だるま作りだのやっていたことになる。ある意味贅沢な休みを過ごし

ていたわけだ。

「う……」

思い出さなくてもいいことまで蘇ってきた。横目で神様の横顔を盗み見るが、神様は遠い眼をしていて、琢磨の表情には意識が向いていない様子だった。

「お陰で琢磨にも欲が出ってしまった」

「あ、ああ　だから、オレに」

神様を頼む、なんて言ったのか。

「得心は、いったか？」

「まあ、事情は分かった。誤解してたみたいだ、その……ごめふ」

語尾が、文字通り埋まった。すすす、と膝立ちでいざり寄ってきた神様が、琢磨の頭を胸元に抱え込んだのだ。

「わかればよい。それにしても、愛いのう、久しいのう」

抱えた頭をなでまわし、にこにこ笑顔でつぶやく神様。しかし抱え込まれている琢磨は笑うどころではない。質感十分な弾力に顔が埋まり、今にも窒息しそうなのである。

「神様、放してくれ。苦しいから！」

もがく琢磨。神様の腕はびくともしないが、もがくのをやめるわけにはいかない。苦しいのはもちろんのこと、顔を埋める感触の正体は今更考えるまでもないので、これ以上の密着は思春期真っ盛りの一男子として大変困るのだ。祖母の前という不謹慎な場で、何がとは言わないが、ばれる。絶対ばれる。

「まったく、そういうところは小さな頃から変わっておらぬのう。」

一丁前に恥ずかしがりおって」

つまらなそうに琢磨の頭を放すと、神様は腰を上げた。

「伝えることは伝えたぞ、琢磨坊。どうするかは、明日訊きに来る。またな」

「あ、ああ、おやすみ神様　って、神様」

「ん、どうした？」

「普段どこで寝てるんだ？」

「わしか。御神体を納めたお堂の中じゃ」

当然のような返答。だがそれは人としてちよつと当然の域を外れている。

「……いや寒いだろそれ」

「言つたじゃろう、琢磨坊」

逆に神様の方が困つたように眉を寄せた。

「心配はしてくれるな。ぬしがそう思つたとたん、わしは人並みの体になるんじゃ。神に風邪とやらを患わづわせる気か」

「心配するなつても無茶な話だぞ、人として」

角が生えているのは明らかに普通ではないが、その外見はあくまでも若く綺麗な女性である。

「では言い方を変えるぞ。信じよ、琢磨坊」

「……わかつたよ」

神様が立ち去り、静けさを取り戻した部屋の中、琢磨は祖母につぶやいた。

「とんでもない頼みごとしてくれたんだな、おばあちゃん」

2 - 2

神社は森の中にある。境内を見下ろせる高さの大樹は珍しくない。そのうち一本の、太い枝の上に人影があることなど、無論琢磨が知る由はなかつた。

夜風に、短い銀髪が揺れた。

参ノ神様と改造人間（前書き）

20111225

3-4にセリフ一行追加

琢磨の父から琢磨の母への呼び方を「母さん」から「かあさん」へ変更。

参 / 神様と改造人間

3 - 1

それを言ったとき、彼女はきよとんとした顔になった。

重ねて言ったとき、彼女は笑い　そして笑った。

初めて見る種類の笑顔がとても綺麗だった。

だから。

すぐにそれを閉ざした寂しげな陰^{かげ}が、記憶に刺さり、今も残っている。

3 - 2

天井に違和感。

見慣れないと思つたら、祖母の家に泊まったのを忘れていた。

軽やかに上体を起こしてみても、琢磨は眉を寄せた。元々未練なく起きられる体質ではあるが、それにしても頭がすっきりしている。

夢を見た直後に目覚めると大抵こうなる。しかし今は内容を思い出せないのに何とも言えない後味の悪さだけがよどんでいた。

「朝っぱらからろくでもないな」

とはいえ、祖母を亡くした昨日の今日だ。底抜けに気分が晴れやかというわけにもいかない。

部屋の布団は三人分。両親はまだ眠っていた。琢磨としては随分遅くに布団へ潜り込んだつもりだったが、こういうとき自分の睡眠習慣の健全っぷりを実感する。

昼前には葬儀屋が祖母を連れに来るそうなので、それを見送り次第ここを発ち、家へ戻ることになっている。その間の手持ち無沙汰だの沈む気持ちだのは、体を動かして解消することにしよう。

枕元の手荷物をあさると、琢磨は部活用のジャージに着替え、部屋を後にした。

「源琢磨は陸上部員である。彼を迎え入れた陸上部はレギュラーしかないのに全国制覇を企む脳筋の弱小集団である。源琢磨は自分の健康と暇つぶしのため、今日も走るのだ！」

「変な要約するな！」

琢磨は思わず真横を振り向き、併走する神様に叫んだ。

準備運動もそこに走り出し、木の根をよけたり段差を跳び越えたりと久々の山の中を楽しんでいると、いつの間にやら神様も隣を走っていた。世間話ついでに近況報告を試みれば、飛び出したのが先のフレーズである。

「フーかそれ仮面ライダーのフレーズだろ！ そんな無駄知識どこで仕入れたんだ!？」

「てれびじょんに決まっておろう。むしろぬしが生まれる前にわしが見たものを、ぬしがなぜ知っておる」

「世の中には再放送してもんがあつてだな、じゃなくてリアルタイムで見てたんかい！」

「最初は南蛮の真似をしたほらあ番組と思うたが、存外光るものを感じての」

現在そのシリーズが再び人気を盛り返していることを考えると、なかなかの慧眼^{けいがん}である。

「わしの好みは、鏡の世界のアレじゃな。どうもあの赤いのが他人とは思えなくてのう」

「平成ライダーまで網羅してんの!？」

「ぬしの好みはなんじゃ？」

「え、オレ？」

まさか神様と仮面ライダー談義を始めることになるとは思わなかった。歳がいくつも見当もつかないが、ひよつとすると世界初のオタクなんじゃないかこの女^{ひと}。

「オレは……」

割と真剣に悩む。ヒーローは好きな方だ。誰も彼も苛烈な生き様

を駆け抜けた仮面ライダーを、これとは決めづらい。

「……ん？ ヒーロー？」

ふと頭をかすめた考えに、琢磨は首をかしげた。

そも、ヒーローとは。強きものであり、正しきものである。結果的に正しく見えるダークヒーローという例外もあるが、それとて人が願う、正義を体現する存在であることに変わりはない。

それは人に願われた存在だ。そう、この仮面ライダーオタクと同じように。

「そうだ ネイガーだ！」

思わず足を止め、叫ぶ。この発想、彼女にはうってつけじゃないか！

「ないがー？ 何じゃそれは、新作か？」

さすがに全国展開していないローカルヒーローまでは知らなかったらしく、不思議そうな顔で歩み寄ってくる神様の両肩を、琢磨はがっしりつかんだ。

「わ……」

「神様、空飛べるか？」

「ま、まあ……雲があればな」

「力、強いよな」

「山の獣くらいなら、素手で」

「よし！ 決まりだ！」

「いい加減にせい！ 説明せんか琢磨ほ」

「一緒に来ないか？」

語尾を食わんばかりの勢いで訊かれ、神様はぼかんと口を開けて鼻先に迫っている琢磨の顔を見つめ返した。

「人里に……降りろ、と言うのか？」

「ああ。神様は神様らしく、スーパーヒロインになればいいんだ」

「は？」

口が開きっぱなしで、さらに目が丸くなる。

「神様を知ってる人間が神様を左右できるって言うなら、たくさん

の人間が神様を知って、いい神様だと思うようにすればいい。それなら誰かがちょっとやさつと神様を憎んだって、蹴散らしちまえるさ」

「琢磨……」

言われたことがのみこめたのか、神様は真顔になっていた。

「琢磨……ぬしは、なんと……」

「オレ、ずっと山の中で生活するのはたぶん無理だ。かといって神様のこと山の中にほっとくのもイヤだ。だから、うちに来ればいい。オレの言うこと、間違ってるか？」

「ふ……ふ、ふ」

指先で目をこすり、琢磨の手から抜けると、神様は肩を震わせながら目をそらした。

「両親には、何と言うのだ？」

「あ……どうすつかな」

考えていなかった。さすがに神様をペット待遇で家に入れるわけにはいかない。仮に内緒で、ばれなかつと、ドラえもん生活をさせるのは大変心苦しい。絵だけ考えると余りに似合わなさ過ぎてかわいいが。

「詰めが甘いのが、琢磨坊」

「でもなんとかする！　ひとりぼつちとか冗談じゃない！」

「ふ、ふ、ふ。ぬしの口車に期待させてもらおうかの」

言うなり、くると背を向け神様は歩き出した。

「神様、呼んだら来てくれるよな」

「おう、構わんぞ」

「ちょっとくらいは話を合わせてくれよ！　また後でな！」

手だけ挙げて応えてくれる神様の後ろ姿が木々の間に消えるのを見送り、琢磨は元来た方向へ走り出した。

何かうまい言葉を考えなければ。そうとも、神様をこのまま山にひとりぼつちにさせておくものか。

「いいよ」

ぶふつ、と茶を嘔く音。

「いいのかそれで!？」

神様の驚きも無理はない。

琢磨が最初から自分を神様呼びわりで呼び出したかと思えば、事情をそのまま両親に説明し始めたのだ。神を話題にするのが大概正気の沙汰ではないことくらい当の神様にも見当はつく。

隣に琢磨、座卓を挟んだ向かいに琢磨の両親、という構図もあいまって言葉にしがたい居心地の悪さに神様が湯呑みから何口目の緑茶を口に含んだとき、説明を終えた琢磨が両親に神様の居候の許可を求めた。

そして、両親は顔を見合わせいくつか言葉を交わした後、了承の言葉を放ったのだ。

目を丸くしている神様に、琢磨の父は、

「母は優しい人間でしたが、流されたりだまされたりするような人間ではありませんでした。その母が一生を懸けてあなたを守ろうとしたのなら、息子である私もあなたを信じます。それに」

一旦言葉を切ると、笑いかけた。

「私はあなたを見たことがあります。幼い頃のたった一度きりですが、そのときと変わらない姿でまたお目にかかつては、息子の正気を疑うどころではありませんよ」

「そうだったか……」

「父さんも神様知ってたのか」

「神様だとは知らなかったけどな」

しかし、一目見ただけの面影をそこまで覚えていられるものなのか？

考えることはみな同じだったらしく、三人分の視線が琢磨の父に集中した。

「いや、その……なんだ」

所在なさげに頭をかくと、彼は真顔になった。

「今おれには、かあさんがいる。それが全てだ　　いてっ」

隣でうつむいた連れ合いから脇腹に肘打ちを受け、真顔が困ったような笑顔に変わる。

「よくもまあ、臆面もなく……」

呆れ顔で、続く肘打ちに甘んじる様を見守る神様。隣の琢磨はと
いうと、そもそもその言葉が何を意味するのか分からず、また誰も
教えてくれないので、困った顔で眉を寄せ、黙っていた。

「いてて、いてっ、こらかあさん！」

「帰ったら丸一日、メニユーのリクエスト受け付けられないから。……
好物しか食べさせてあげない」

「楽しみにしてる。　　ご存じかもしれませんが、私は錬磨とい
ます」

「朱鷺絵です」

「オレは」

「いやよく知つとる」

「みもふたもねえ！」

「わしは紗雫媛。源の竜神である。不束者じゃが、よしなに頼む」
源家に家族が増えた。たぶん、おばあちゃんポジションで。

肆ノ神様のシルクハット(前書き)

20111215

第三話に3 - 4 追加

肆ノ神様のシルクハット

4 - 1

金が要る。

大金が、今すぐに。

パチンコや競馬で当てれば間違いなく入ってはくるが、それを待っている暇はない。下手をすれば今夜にでも借金取りに捕まり、内臓なり何なり命懸けの手段で借金を取り立てられてしまうのだ。

手段を選んでいる余裕はない。

そつだ、銀行、行こう。

マスクと軍手はもう着けてある。サングラスと上着と包丁はついさつきスーパーで買ってきた。俺も馬鹿じゃあない、使うのは全部珍しくもない安物だから、用が済んですぐ捨てれば足はつきづらいはずだ。

一旦前を通り過ぎ、自動ドアのガラス越しに中にいる人数を確認する。平日の昼下がりということもあり、結構少ない。

まずは深呼吸。出だしでとちつてなめられてはたまらない。

「よし
いくぞ。」

サングラスをかけ、上着の懐に忍ばせた包丁の柄を握り、自動ドアの前に立つ。

「いらっしやいま」

さっそく歩み寄ってくる銀行員を捕まえ、包丁を突きつける。

「騒ぐな。どういう客かはわかるだろう」

引きつった顔で小刻みにうなづく銀行員。カウンターの向こうや、他の客も事態を理解し、店内が一気に静まり返る。しかし、何やら電子音が止まない。

店内を見回すと 変なのがいた。

「ふ、ふ、ふ。わしのぼすごどらは百戦錬磨じゃぞ。……ん？」

変なのがこつちに気付いてDSを閉じた。

長い黒髪に赤く長い帽子をかぶった、赤と白の着物の女。状況がわかっていないのか、周囲を不思議そうに見回している。俺以外の全員が目で叫んでいた。空気読め！と。

「お前も動くな。ぶつ刺されなくなかったらな」

しばらくじつと俺を見つめていたそいつは、俺の言葉が届いたのかどうか不安になりかけた頃、閃いた、という風情で手のひらを拳で叩き、立ち上がった。

「ぬしは、銀行強盗か！」

「何だと思つてたんだテメエ！」

なめてんのかこいつは！

「つまり、悪い奴じゃな！」

「だからどうしたよ、正義の味方が、ええ！？」

捕まえていた銀行員を突き飛ばしざま歩み寄り、切りつけ　あれ手応えすげえ硬え？　包丁弾かれて飛んじまったんだけど？

あっけにとられる俺の腰を、女がぐいと抱え、持ち上げた。

「な、何しやがる！」

女の脇に抱えられ、腰を支点に畳まれるような体勢。俺の尻が前、上半身が後ろを向く。女の力は異様に強く、腕が全く外せない。

「お仕置きじゃ。後で駐在さんにもしぼってもらうことじゃな」

女の片手が空く気配。

「え？」

「ばちいいいん！！」

「ぎゃあああッ！？」

「痛え！　何！？　何された！？」

「ばちいいいん！！」

「ぎゃああああッ！！」

「痛え！　尻痛え！　尻ひっぱたかれてるのか俺！？」

「な　なんなんだテメエ！？」

「ん？　わしか。えーと……通りすがりの竜神じゃ。覚えておけ」

「ばちいいいん!!」

「ぎゃあああああああッ!!」

頼む、おまわりさん。俺が悪かった。だから早く助けて……。ばちいいいん!!」

4 - 2

「源センパイ、タオルどうぞ!」

「ありがとう。悪いけどそこに置いていてくれるか。もうひとつ走りしてくる」

「あ、はい。わかりました……」

心なしが落ち込んだ表情のマネージャーの脇を抜け、琢磨は校門から外へ走り出した。

放課後の街は茜色あかねに染まり、沈みかけの残照がまぶしい。

「相変わらずクールだな、源」

聞き慣れた声が追ってきて、その主の気配が程なく隣に並び併走を始めた。

「マネージャーの笑顔を一刀両断とか、マジ鬼じゃね?」

「鑑か」

鑑宗佐そうすけ。自分と同じ、陸上部の中距離要員だ。振り向くまでもなく、いつもどおり日焼けした浅黒い顔に人懐っこい笑みを浮かべているのだろう。陽射しが熱いしまぶしいしでありそちらを向きたくない。

「おばあちゃんだっけ。落ち込むのはわかるけど、もう一ヶ月経ってるはずだろ。悪い意味で本調子取り戻してないか」

「そんなこと言うんならお前がフォローしてしてくれよ。女子好きだろ」

「うん、あの子かわいいしな」

横目で見ると案の定、満面の笑みで親指を立てるイケメン一匹。歯は白く、上がった口角がきらりと輝いている。

「今日モス行く約束は取り付けてある!」

「……さすがすぎる」

常日頃、女性はこの世の宝だぜ！ と公言してはばからないだけのことはある。いい意味で油断も隙もない。

「だがな源、オレが言いたいのはそこじゃない」

「ん？」

「お前さ、女子避けてるだろ」

「苦手なんだよ。悪いか」

「悪いな。かなり悪い。話がすべっちゃうパーティーの司会並みに悪い」

「価値基準わかんねーよ」

「でも、苦手つつつても源は女子とも普通に話してるしなあ……」

「まあな」

別に異性に興味がないわけではないし、話すこと自体も苦ではない。幼い頃の遊び相手が超のつく年上の女性だったことが少なからず影響しているのだろう。もちろん、そんなことを口に出す気もないが。

「オレの心配してどうすんだよ。好きなように女子と遊べばいいだろ」

「わかってないなあ源。オレは大好きな異性交遊で抜け駆けするつもりはないぞ。だいたい、相手のいない男子の前だと、女子だって居心地悪くて男子と遊びづらいじゃないか」

これだからこのイケメンは同性からも好かれてるのだ。さわやかすぎず堂々と私利私欲を公言しているので嫌みがなく、付き合いやすいし実際誰とも気安く話している。琢磨にはできない芸当だった。

「何か理由あるんだろ？」

「理由ねえ……」

理由ならある。しかしわざわざ人に口外するものかどうか。

源琢磨は女の笑顔が苦手なのだ。

綺麗なものだとは思う。しかしそこに壊れやすそうな儂さを感じ

てしまい、どうにも女性に関わる気がしないのだ。とは言え、素っ気なく当たって自分から女性に笑顔を浮かべさせないというのも本末転倒な話ではある。

「オレも矛盾してるなあ」

「矛盾？ まあ、自覚してるなら後は克服あるのみだな」

「軽く言っつなよ」

「なーに、そのうちイヤでもムラムラしてくるって。オレたち思春期真っ盛り！ 青春しようぜ！」

「アホかつ！ 置いてくぞ！」

学校の周囲のランニングコースも終盤に近づき、琢磨はスパートに入った。

「オツケ、じゃあ校門まで勝負な。負けた方がポカリー一本、ペットで」

「乗った！」

「よっしゃ、そうこなくちな！」

そろって全力疾走。

元々中距離走は、いくつか枠があるものの800から3000メートルという距離を高速で走り続ける競技種目だ。今までのランニングも練習の締めめのクールダウンでしかなく、二人とも体力には十二分に余裕があった。

茜色の空の下、校門に砂埃すなほこりが舞い上がり 琢磨の財布はちよつとだけ軽くなった。

4 - 3

「ただいま」

玄関のドアを開けて早々、食欲をそそる匂いに出迎えられ、琢磨の腹の虫が鳴いた。すぐにおいしくご飯をいただけるとなれば、やはり買い食いを我慢したのは間違っていなかったらしい。

「おかえり」

台所から、母の声だけが聞こえてきた。どうやら父はまだ帰って

きていないようだ。

「母さん、媛ひめは？」

居間をのぞき込み、比較的普通の響きから採用された呼び名で神様の所在を問う。

神様は料理ができないので、琢磨の母が食事の支度に入ると構ってくれる相手がいなくなり、夕方は大抵琢磨が帰ってくるのを待ち構えているのだ。

祖母が亡くなってからもう一ヶ月が経つ。人里に降りてきて現代の生活にも慣れ始めた神様の最近の趣味はポケモン勝負で、琢磨との対戦で戦略を日々充実させていく神様は、ストーリーを追う、通り一遍のプレイしかしていない琢磨にはなかなか手強い相手になりつつある。

お出迎えがないとなると、どこかへ出掛けているのだろう。

「銀行に行ってるわ。ちょっと手続きをお願いしてあるの」

「そっか。じゃあ荷物置いてくる」

ジャージの類を洗濯機へ放り込んで階段を上り、部屋のドアを開けざまカバンとスポーツバッグを下ろし、ブレザーのネクタイを緩める。

「銀行におつかいか……慣れてきたもんだなあ」

神様には鹿のような長い角があるが、それは人の目に触れないようにしてあり、外出自体が騒ぎになるようなことは別に心配していない。気がかりと言え、ごく普通にトラブルに巻き込まれること危ない目には遭わずとも、一般常識がまだ田舎のおばあちゃんレベルなので、妙な物事に引つ掛かってはいないだろうか。

と、玄関のドアが開いて、閉まった。

「ただいま帰ったぞ」

案の定、神様だ。

「おかえりなさい」

「おかえり。なんか遅かったけど、どっか寄ってたのか？」

母の声に続き、階段を下りながら問う。

「おう、琢磨坊。帰っておったか。悪ガキを懲らしめておつたら駐在さんにお茶をいただいでしまつてな。ついつい話し込んでしまつたわ。しかし最近のてくのろじいはすごいものう、今は駐在さんたちも仲間がどこにいるかすぐに分かるらしいぞ。じいびいえずとかいうそつな」

満足げに目を輝かせながら、草履を脱いで上がつてくる神様。その頭上には、フェルトでできたふわふわの赤いシルクハットがのつている。両親と共に悩んだ末、琢磨坊が選んだ“角隠し”だ。他にも候補はあつたのだが、神様はこれがことさら気に入つたらしく、外出するときは必ずこれをかぶっている。

「テクノロジーか、そつだよな、昔はでかくて重かつた電話が、今はナビ機能も込みで手のひらサイズだからな」

祖母の家にあつた電話を思い出す。ダイヤルを回しては戻し、で架けるという使い方、今となつては気付きもしない人間もいるのではないだろうか。

「さて、脱ぐのはちと難儀じゃが」

角が内側の縁に引つ掛からないよう背伸びしつつ腰を曲げるような不自然な体勢でシルクハットを脱ぎながら、神様。腰まであるさらさらの黒髪がしばらく揺れる。

「ありがとつな、琢磨坊。ぬしのお陰でこうして気軽に散歩できるぞ。これは大変いいものじゃ」

シルクハットを胸元で持ち、にこにこ笑つ神様に、知らず、琢磨坊の顔が赤くなる。

「い、いや、べ別に、気にしないでくれよ。気に入つてくれたんならいいんだ、うん」

自分でも不自然なほどあからさまに顔をそらし、ぎくしゃくと脇を通り過ぎ居間に入る琢磨坊。

神様の笑顔にどきつとした。この女は、やはり綺麗だ。そしてこつも思つた。

オレ、なんで神様の笑顔は平気なんだ？

伍ノ神様に手を（前書き）

2011224
5-4修正

伍／神様に手を

5 - 1

それは恐ろしいものだった。

雨、風、雷、地滑り、人の恐れる災いを一手にもたらず存在を願う者がいて、その心に訴えて災いを避けることを願う者がいたから。だからそれは災いだった。

その居る淵にはしばしば人が沈んできて、すぐ動かなくなった。沈んでくる人の願いは特に強かったから、それはその願いのとおりに、鎮まりあるいはより激しく荒れた。

沈んできた人の体は、その恐ろしい体に触れると、簡単に、そしてひどく傷ついた。人はとてもとても弱々しいものだった。

やがていつからか、それは恐ろしい姿だけでなく人に似た姿も得た。

人に触れられなかったそれは、動かない人を傷つけずに触れることもできるようになった。

けれど。

誰もそれに触れてはくれなかった。

5 - 2

「平和じゃな」

言ってちゆう、とバナラシェイクを一口吸う神様。

「そうだな」

ポテトをほおばりながら、琢磨。

「誰も『イーツ！』などと叫ばんの」

言いながら包み紙を解き、神様は顔を出したハンバーガーをしげしげと眺めている。

「そうだな」

「すつばあひろいんは」

「なるの一苦労だな」

「……琢磨坊」

「安請け合いましたごめんなさい」

神様に横目でにらまれ、琢磨はテーブルに両手をつき、突っ伏し気味に頭を下げた。

「まあ、口車に乗ったわしもわしじやが」

「ぎこちなくハンバーガーを食べ始める神様。その眉がくい、と上がった。」

「ん、いけるの。柔らか過ぎる気がせんでもないが、こういう洋風の味付けもなかなか」

日曜の昼下がり、晴れ空から注ぐ陽射しは穏やかである。

琢磨の発案した『神様スーパーヒロイン化作戦』に則り、神様はパトロールと称して琢磨を伴い街まで出てきていた。

華々しく神様のすごさをアピールすれば、神様の味方だったたくさん得られるはず、という目論見めくろみではあったが、そもそも現代日本において“倒して納得の分かりやすい悪党”など天下の往来かうばを闊歩くわんぽしていようはずもない。当ての外れた二人はとりあえず腹ごしらえに走ったのであった。

「悪い、媛。今考えてみたら確かに適当なこと言ってたとは思いつけど、別にウソついてかつごうとかさういうつもりはなかったんだ」
支払いを済ませ、財布をしまいながら琢磨。

「ふ、ふ、気にするな。琢磨坊はよい子じゃ。うそをつくような性根でないことくらい知っておる」

笑みの形に目を細めると、神様は琢磨の首を片腕で捕まえ空いた手で頭をわしわしとなでた。琢磨は決して小柄ではないが、神様が長身なためほとんど身長差がないのだ。加えて神様の腕力は琢磨を大きく超えているため、抵抗も許されず引き寄せられる。

「ちよ、恥ずかしいだろ。離れるよ」

シャンプーか何かだろう、ほのかな香りと、首筋を捉えた柔らかさに、神様に異性を意識してしまった琢磨はつい反射的に神様の腕

を振り払い、歩を進める。

「つたく『よい子』って……オレこれでもいっぱしの男のつもりなんだけどな」

どうにもこの女、スキンシップが積極的で困る。自分は恥ずかしいのに相手は恥じらいを何も見せない辺りが男扱いしてくれていないようで、あまり面白くない。

「何を言っておる。ひいき目に見積もつても、男前には十年早いわい。さあ、せつかくじゃ、現代の街を案内せい」

軽やかな足取りで琢磨を追い抜いた神様が数歩先で振り返り、言葉と共に手を差し伸べる。何を要求されているのか分からず、琢磨の視線が神様の顔と手との間を数回往復した。

琢磨の困惑に、神様も不思議そうな表情になった。

「いつぞやはわしが手を引いて森を案内してやったじゃろう。今度はぬしの番じゃ」

「それってつまり、手をつなぐってことか？」

知らず、琢磨の声が硬くなる。

「いやなのか？」

神様の顔は当然のことを断られている風情だ。

「媛……」

琢磨は確信した。

間違いない。この女、本当にオレのことを男だと思ってない。今もまだ、小さな子ども扱いでしかないんだ。

「イヤだ」

「琢磨？」

琢磨の様子が変わったことに気付いた神様は手を戻し加減に首をかしげた。

「手なんかつながない。オレを子ども扱いするなよ」

「琢磨、怒っておるのか？ わしは何かおかしいことを言ったか？」

「ああ、言った。オレはいつまでも子どもじゃない」

「琢磨……何を言っておるのじゃ？」

「……！」

何か口汚い言葉で怒鳴りつけてしまいそうな気がして、琢磨は神様から顔を背けた。神様の顔に浮かんでいる表情は、冗談やあざけりの笑みではなく、心底からの困惑。琢磨のいらだちを本気で分かっている。

周囲を通り過ぎる人々の声や視線、姿が余計にいらだちをかき立ててくれる。

「琢磨」

初めて聞く、神様のどこか不安げな声。

「わしを」

琢磨は顔を背けたまま走り出した。

神様がどんな顔でそんな声を出しているのか、知りたくもなかった。

5 - 3

いらだちだけぶつけて逃げ出す自分を、最低だと思った。紛れもなく、逃げたのだ。しかも、今も逃げ続けている。

神様を置いて先に帰り、神様が帰って来ても顔を合わせず、その夜や今朝の食事のときも目を合わせていない。もちろん言葉など交わしてもいない。

「男だなんだって言って、こんな男じゃねえ……」

始業前の教室、浅いざわめきの中で机に突っ伏したまま、琢磨はつぶやいた。

相手にいらだちをぶつけて、相手の言い分を聞くことなく、自分の考えとの折り合いをつけることもなく、自分から話を打ち切って逃げ出した。

これでは不快感にむずかる赤ん坊と変わらない。

「すげえ格好悪い……」

「源」

「あー食欲ねえ」

昨日の夕飯も、今朝の朝食も、まともに喉を通らなかつた。思ったより、自分は繊細せんさいな作りだつたらしい。

「おーい、源」

「……んだよ、人がどん底に沈んでるときに」

顔を上げれば、親指を立てたイケメン一匹。鑑宗佐であつた。人柄といい、まどつている陽性の空気といい、今の気分きぶんに全くそぐわない。

「二番目に見たくねえ顔見ちまつた」

「朝の第一声それか！？ 過去最高に失礼だなお前！」

「今のオレの気分、お前にやわかんねえよ、たぶん」

きつとこいつなら、対人関係では男女問わずどんなトラブルとも無縁むげんなのだろう。

「なんだよ、せつかくひやかしに来たのにえらく沈んでるな」

「ひやかし？」

「昨日、女連れで歩いてたろ」

「見てたのか」

「ママ先輩とスパイク買いに行つてたんだ。そしたらお前見かけてな。声かけようと思つたら、隣にすごい綺麗なお姉さんがいたんでやめといた」

「さすがすぎる」

用件そのものは珍しく色気がないが、同行者にばつちり異性を選んでるのが彼らしい。

「なんか世間慣れしてない感じだつたけど、いい雰囲気ふんいきだつたな。やることはやってんじゃん。ほつとしたぜ源」

「いい雰囲気ふんいきつて、あのひとおばあちゃんの知り合いってだけで、別にそんな」

「そうなのか？ まあ……そうか。言われてみれば親戚にも見えたな。源のことが好きで好きでたまらない感じだつたし」

「そう見えたか」

それはたぶん、言われて嬉しい種類の言葉だが、琢磨そまの気分は晴

れない。

実際、神様は琢磨を嫌ってはいないのだろう。鑑の言うようにとても気に入られているのだと思う。

しかし、その好かれ方は、琢磨は嫌だったのだ。

「……やっぱオレ最低かも」

元々住んでいた場所から連れ出して、連れ出すときの約束を守れず、あげく向けられている好意にかみついた。

子どものがままそのままだ。意地を張っても、結局子どもではないか。

「なあ源」

ぼん、と鑑は琢磨の肩に手を置き、顔をのぞき込んだ。その眼は、いつになく真面目な色を帯びている。

「なんだよ」

「話してこいよ。何があつたか知らないけど、行き違いがあつたんなら、言いたいこと言って、言われること聴いて、お互い納得しないとすつきりしないぜ」

「そうか……そうだな」

始業を告げるチャイムが鳴り渡る。鑑は景気付けにか琢磨の背中を平手で叩くと、席に戻って親指を立て、にっと笑って見せた。

「つたく、イケメンめ」

しかし、いい奴だ。

思いのほかすつきりした気分で、琢磨はバッグの教科書を探った。

5 - 4

ぼふ、と音を立て、布団が床に置かれた。陽射しを浴びて空気を適度を含み、布団はふっくら柔らかい。

「これで、全部じゃな」

「お手伝い、ありがとうございます」

「わしは強力じゃからな、骨折りでも何でもなしぞ」

ベランダに干してあった布団や毛布を軽々と取り込み終え、神様。

琢磨の母、朱鷺絵と共にそれをたたみながら、手触りを確かめるように毛布をなでるその表情が、ふと曇る。

「媛様？」

「朱鷺絵よ、わしは人に触ってはいかんか？」

「え？」

しょんぼりとうつつむきながら、神様はつぶやいた。

「琢磨が、怒った」

「琢磨が？」

「頭をなでたり、手をつなごうとすると、嫌がるのじゃ。わしが触ること自体を嫌がっているような気もする」

言われて、朱鷺絵は戸惑った。頭をなでたり、手をつないだり、それはかなり、子どもじみてはいないか？

しかし、神様はいたって真顔で落ち込んでいる。悩んでいるのだ。昨日の夕方から、琢磨と神様の様子がおかしいとは思っていたが、まさかそんなことで行き違いがあったとは。

「朱鷺絵」

神様が朱鷺絵に視線を投げる。

「琢磨はわしが嫌いになったのか？ 嫌いなのに、山から連れ出してくれたのか？」

「まさか。小さな頃のあの子をご存知なのでしょう？ あの子は昔からウソが下手で。今だって嫌いな相手には愛想笑いもできませんよ」

「それは……知っておるが。ではなぜ、琢磨は怒ったのじゃ？」

「その……媛様。子ども扱いされれば、ああいう年頃の子は怒りますよ？」

「まだ子どもじゃろう？」

ああ、そこか。と朱鷺絵は納得した。

大人は子どもの気持ちかわからない。大人の多くは自分が子どもだったころのことを忘れてしまうからだ。早く大人になりたくて、大人として扱ってほしくて、でもその大人用のプライドを裏切る自

分の未熟に悶え、それでも走り続けたことを、忘れてしまう。そして親になったとき、苦笑いと共に思い出すのだ。自分は結局子どもだったのだ、と。

神様に子ども時代があつたかはわからない。しかし、長生きしている以上その考え方は大人のものに違いないだろう。だから、すれ違つてしまったのだ。

「大人です。琢磨はもうすぐ、大人ですよ」

「そうか……琢磨には悪いことをしてしまったのじゃな。そのつもりがなかったとはいえ、ばかにしておつたのか、わしは」

ふう、とため息をつく神様。

「ならばこれからは大人の触り方をしなければならん。夜だけなのは残念じゃが、それなら琢磨もわしを触ってくれるじゃろうし、仕方ない」

「え……夜だけ？」

「ん？ 口を吸つたり、服をはだけたりすればよいのじゃろう？」

境内で見たことがあるぞ」

「ひ、媛様！？」

「何じゃ」

思わず叫んだ朱鷺絵を見返す神様の顔は平静そのもの。それがどういう意味を持つ行為かを理解しているようには見えない。

「もしかして、わしはまた何か思い違いをしておるのか？ わしは人に触るのが好きじゃから、人が死なぬ力加減や、人が人と触れ合う様は研究してきたつもりじゃが」

「……そういう、ことですか」

改めて、朱鷺絵は理解した。

このひとは、幼い。人格や経験は大人かも知れないが、心が幼いのだ。

人に触るのが好き、人に触りたい、触りたいのに怒られた、彼女の気がかりはそれだけだ。手元で扱える気持ちは単純過ぎて、きつと自分の身に置き換えても他人の気持ちはわからないのだ。当然」

絶対にこの相手』という熱と渴^{かわ}きを帯びてこそ始まるはずの行為も、意味がわからず重大に感じないから抵抗もないのだろう。

ふと朱鷺絵の中に疑問が浮かんだ。

「そういえば、媛様？」

「なんじゃ、朱鷺絵」

「私や夫には、あまり触れてくれないんですね」

琢磨が追い回されているのは日々見ているが、同居して同じ距離にいる自分たちはというと、困るほどのスキンシップを受けた覚えがない。そういった行動の対象が、なぜ琢磨だけなのだろう？

「わしは、琢磨がいい」

「というと？」

「いつか、ひとり子どもがわしの手を取り、握ったことがある。

そのときまで、生きた人間が自分からわしに触れることなどなかったから、驚いたし、嬉しかった。その子どもと、いつかまた会いたかった。そして、会えた。そのとき

ふわり、と微笑みが浮かぶ。

「もつと、嬉しかった」

「その子どももつて……」

なんとということだろう。こんな 綺麗な。簡単に壊れそうな澄んだ思慕^{しほ}。まだ愛情とは呼べないかも知れないけれど、神様は琢磨が好きで好きで仕方がないのだ。

そんな大事なきらめきを、取り返しのつかない無知で台無しにしてはいけない。

朱鷺絵は言った。

「媛様、それは夜だけとか、大人用とかではなくて、とても大事に思う相手とすることです。媛様自身が意味をよくわかっていないのに琢磨を相手に選べば、媛様はもちろん、琢磨も、子ども扱いよりずっと、深く傷つきますよ」

琢磨の名が出たとたん、びく、と神様の手が震える。うつむき加減のその口から、ささやきがもれた。

「それは 嫌じゃ」

「そうでしょう?」

「ならば朱鷺絵、わしはどう琢磨に触ればよかるうか。どうすれば琢磨は嫌がらんじやろう」

顔を上げた神様の不安げな眼が朱鷺絵の顔を映した。

実際不安なのだろう。自分の感情表現が怒りで返されて、やり方がまずかったことにも気付かなかったのだから、きつと感情そのものを否定されたように感じていたのだ。

大丈夫、と朱鷺絵は両手で神様の手をそつと握った。

「きつと琢磨は、媛様が嫌いなのではなくて、困っているんです。恥ずかしいって、言ってますでしたか?」

「ん……言っておった」

「そこからですね。本人と相談してみましよう。あの子もきつと、学校が終われば少しは頭も冷えているでしょうし」

「そうか……わかった。相談してみる」

5 - 5

悪かった、と二重奏。

「え?」

「お?」

きよとんとした顔で、琢磨と神様は同時に下げている頭を同時に上げた。

「どうかしたのか、媛」

「琢磨こそ、どうしたのじゃ」

「いや、昨日は悪いことをしたって謝りたかったんだ。勝手なことだけ言っただけ悪かった。媛にも思うところあったらどうし、訊いてもいいか」

「そ、そうか。わしもじゃな、子ども扱いして悪かったな、琢磨」

「……わかつてくれたのか」

「まあ、その、朱鷺絵に相談してな。わしも物知らずじゃった。す

まん。わしはただ、琢磨と仲良くしたかったし、琢磨に触りたかっただけなのじゃ」

「そっか……じゃあ」

琢磨は神様に右手を差し伸べた。

「握手。これで仲直りだ」

「うむ……」

ためらいがちに伸びる神様の手を、琢磨が捕まえ、握りしめる。

「またよろしくな、媛」

「おう、またよろしく頼むぞ、琢磨」

ぐ、と神様の手にも力がこもる。

「　　いててて！　痛えよ媛！」

「知らぬ。しばらく放さんからそのつもりでな」

「いや放せよ」

「嫌か？」

「嫌じゃねえけど」

「ならよかろう」

「理不尽だっ！」

「さっそく仲いいわねえ」

ひよい、と居間から朱鷺絵が顔を出した。

「あ、ただいま母さん」

「お帰り琢磨。媛様とクッキー焼いてみたの。荷物置いてらっしやい」

「へえ、何かいいにおいすると思った。ほら媛、放せよ」

「仕方あるまい。すぐ戻るんじゃぞ」

「二階に行くだけで何言っただって」

階段を駆け上がる琢磨。段を飛ばすその足取りは軽かった。

伍ノ神様に手を（後書き）

彼の名前から「坊」が取れました。

陸／神様とマネージャー

6 - 1

目覚めた瞬間焦げ臭い。

「火事か!？」

がば、と布団をはねのけ琢磨は跳び起きた。

部屋を飛び出し階段を駆け下りる。居間に飛び込むと黒煙を上げるガスコンロ　のそばに人影が二つあった。琢磨の母と、なぜか神様。彼女はいつもならまだ寝ているはずだが。

「おはよう琢磨」

「ああ、おはよう母さん　じゃねーよ！　火事か無事か無傷だな!？」

「うん、無事鎮火。ごめんね琢磨、それにお父さん。ちょっと失敗しちゃった」

息子と、遅れてやってきた夫に、朱鷺絵は「てへ」と後ろ頭に手を当ててみせた。

「いや、ちよつとつてレベルじゃないだろあれ」

琢磨の視線の先には、全く原形を留めていない黒い何かがこんもりと乗った黒焦げのフライパン。飛び出した中身がガスコンロや周囲の壁にこびりつき、台所は黒煙とすすと焦げた何かでもはや暗黒一色の魔界と化している。

「片付けは……ちよつとかかるわね」

「朝練休むわ。父さん仕事だし、これ母さんだけだと面倒だろ」

「いいの?」

「いいから言っただろ」

「ありがとう琢磨。助かるわ」

「で、あつちは何してるんだ?」

「シヨックなことがあったのよ。そつとしておいてあげて」

朱鷺絵の後ろでは、さつきから無言のまま神様がうつむいている。

彼女は普段の巫女装束に、デニム地に毛筆タッチで『チェンジ冷熱ハンド!』と書いてあるエプロンを付けていたが、元が和装な上にエプロン全体が黒く汚れていることもあって、凜とした美貌には壊滅的に似合っていない。

「シヨツクなことねえ」

「とりあえず、朝ご飯は用意できてるわ。けど、お弁当を作るうと思ったらやり過ぎちゃって。お父さんの分は確保できてるから安心してね」

その言葉に、琢磨にはちょっとばかり嫌な予感がした。お父さんの分「は」って、何だ？

「ありがとう。しかしかあさんが失敗なんて、珍しいな」

「ちよつと事情があつて。後で話すわ」

「ところで母さん……オレの分の弁当は？」

「ないわ」

朱鷺絵はきつぱり言い切った。予感を裏切らない豪速球である。

「ひでえ!」

「琢磨の優先順位はお父さんの次。諦めなさい」

「さすが母さん、潔こはやくいぜチクシヨウ!」

「でもお昼時にはちゃんと食べられるようにするから、そこは心配しないでいいわ」

「そっか」

とたん、琢磨の表情が輝きを取り戻す。

「あてにしているぜ」

「私はそろそろあてにされなくてもよくなりそうだけどね」

「なんだそれ」

「さあ、何かしらね」

くすくすと笑いながら、朱鷺絵は朝食の準備に移った。

神様は、まだコンロの前で固まっていた。

少し前のことだ。

陸上部のマネージャーである橘川直は部室の片付けをしていた。埃が立つので換気のため窓やドアは開けてあったが、かさばるものも多く、一通り片付け終わる頃には彼女の額にはうっすら汗が浮いていた。

残っていたのは、用具ロッカーの上に積まれた、古いスターティングブロック。トラック競技のスタートダッシュに使う足場だ。長い金属の塊なので当然重く、後回しにしていた。

他の部員はランニングに出ているし、いても本来マネージャーの仕事である片付けに部員の手を借りるのは少し申し訳ない。だから直は、自分ひとりで片付けようと脚立を持ち出し、ロッカーの上に手を伸ばした。

「ん……！」

小柄な彼女には、脚立の高さも少し足りなかった。脚立の上で背伸びして、ようやく指先が届く程度。

何度か指先を引っ掛けて、スターティングブロックが動いた、と思ったときには、それは崩れ、落ちてくるところだった。爪先立ちでふらつきながら引き寄せていたので踏ん張りは利かず、それを避けることはできない。

悲鳴を上げることができなかった。

その暇がなかったからではなく、服の背中をつかんで後ろへ引っ張られ、首が絞まっていたからだ。

間近で床に激突してワンバウンド、こちらへ倒れそうになるスターティングブロックが蹴飛ばされ、頭上から声がした。

「大丈夫か」

「げほ、ごほっ」

返事をしたくても、できない。舞い上がった砂埃で、余計に息が苦しかった。

「あ、悪い。つかみっぱなしだった」

解放されて、深呼吸。見上げてみると、陸上部のロゴ入りジャー

ジを着た背中越しの横顔には見覚えがあった。

「源センパイ！」

「危ないだろ。お前ちっちゃいんだからこういうのは他のやつに頼め」

目が合ったのも束の間、源琢磨はそれきり直に構わず歩を進め、奥にある自分のロッカーから取り出したペットボトルのラッパ飲みを始めた。

「あの、源センパイ」

ペットボトルから口を離して無言で向けられた眼に、直は思わずびくつとすくんでしまった。この先輩、普段から眉が怒ったような逆八の字で、しかも無口なのだ。にらまれてはいないのだが、近寄りがたい。

直が言葉を継げずにいると、逆に質問が飛んできた。

「お前、回し飲み大丈夫か？」

「え？ えと、はい」

質問の意図はわからないながらも、うなづく。コンビニで冗談としか思えないような期間限定ペットボトルを見つけては友達同士で回し飲みすることはよくある。最近一番のヒットはアズキ味のコーラだった。

でも、なんでいきなりそんな。

「やる。汗かいてるみたいだし」

すれ違いざまキャップをしておしたペットボトルを押し付け、源琢磨はすぐまた部室を出て行った。どうやら水分補給に寄っただけで、練習はまだ続けるつもりなのだろう。

「源センパイ……」

怖い人だと思っていた。初対面の頃から自分とは目を合わせようとしてもしなかつたし、数少ない会話でもひどくぶっきらぼうだったから。

本当は、怖くなんかなかった。いい人だ。むしろ危ないところを助けられて見上げたあの後ろ姿は ヒーローみたいだった。

その場にまた自分ひとりになり、受け取った体勢のまま両手で握りしめていたペットボトルに視線が落ちる。

「ど、どうしよ……」

急にどきどきしてきた。たった今まで、先輩が飲んでいたものだ。回し飲みはよくやる。でも、男の人と回し飲みをしたことはまだない。だってほら、それって、あれだ。少女マンガとかでおなじみの間接……。

「いや、ほら、でも、先輩、わたしが汗かいてたからくれたものだし？ 深い意味なんかないんだ、たぶん。あつたら困るし、どういう顔すればいいかわからないし、ていうか、せつかくもらったものを捨てちゃうのは、もつたいないよね？」

もちろん、全部独り言。直自身、自分で何を言っているのかよくわからなくなってきた。

「と、飛んでけ邪念！ いただきます！」

とりあえず決行。どきどきしたまま一気飲みしてしまったので、中身の味はほとんど分からなかった。

そして 今。

もらったペットボトルは、なんとなく手放せず、今も部屋に置いてある。

言いそびれたお礼を言う機会がほしくてよくタオルを渡しに行くようになったけれど、源先輩は相変わらずぶっきらぼう。会話もできない。助けてくれたことを恩に着せるどころか、ひよっとするとわたしの顔も覚えていないかもしれない。

でも、タオルを差し出せば「ありがとう」とお礼は必ず言ってくれる。やっぱりいい人なのだ。

そのうちに分かったのは、女が苦手らしい、ということ。実際、それを教えてくれた鑑先輩と一緒にいるときは、ときどきだけけれど、笑っている。女子部員やマネージャーと顔を合わせたときは、絶対、笑わない。

どうして女が苦手なんだろう。何かつらいことがあったのかな。

できるなら力になりたい。わたしは、いいところ知っちゃったから。

6 - 3

源琢磨は学食で昼食をとる。

普通の男子高校生の例に漏れず母親の弁当持参でそれしか食べないが、別に注文しないからといってとがめられることはない。

特別誰かと話しながら食べるのが好きなわけではなく、そもそも相手もいないのだが、人のざわめき自体は嫌いではないのだ。

だから、昼放課のチャイムが鳴ったほとんどその直後に震えた携帯電話の画面を見たとき、琢磨は困惑した。

『屋上に行くこと』

母から届いていたメールの文面は、そのたった一行だけだった。

「なんだそれ」

つぶやきに応えがあるわけもなく、そして空腹は、疑問をはさむ余地のない強制力であった。なんといっても生き物の根幹たる三大欲求の一角である。

しぶしぶながらも手ぶらの琢磨は屋上に向かうしかなかった。

埃っぽい階段を上り、軋む鉄のドアを押し開けるなりドアの隙間から差し込む光に、思わず目を閉じる。

「へえ」

目が慣れてみると、穏やかな陽射しとゆるい風。初めて来てみたが、給水タンクや配管が鎮座している殺風景さの割に、居心地がよさそうだ。

がさ、とビニール袋がこすれるような音がした。

「先客か？」

先へと進んでみると、手頃な配管に腰を下ろしてリスよろしく胸元に両手でつかんだパンをぱくついていた女子生徒が、琢磨の姿を認めたとたん、びく！ と立ち上がった。制服のネクタイの色から、下級生だと分かる。

驚いているようだが、パンを口に含んだ直後だったらしく、丸くした目で琢磨を見つめながら、口がもぐもぐと忙しく動いている。反応に困る琢磨と、驚いている女子生徒。微妙に気まずい静寂は、女子生徒がパンを飲み込み、ようやく表情どおりの声を発したことで破られた。

「源センパイ！ どうしてこんなところに！」

「は？」

誰お前、と言いかけて、その顔には見覚えがあったことに気が付いた。

「お前、マネージャー？」

「そ、そうです！ 橘川直です！」

「いや、名前言われても。覚えてないし」

「やっぱり!？」

がつくりとうなだれる直。でも、胸元に両手で持っているパンは放さない。そこから漂う香ばしい匂いに、琢磨の腹の虫がぐう、と鳴いた。

「あれ、源センパイ、ご飯はどうしたんですか？」

「食べるはずなんだが」

どういことですか、と言いかけた直と琢磨に注いでいた陽射しが一瞬翳り、ずどん、と屋上全体が揺れた。

直後響く、綺麗な低女声。^{アルト}

「待たせたな琢磨！」

「なにい!？」

ぎよつとして周囲を見回す琢磨の前に、長身の女性が頭上から軽やかに一回転して降り立った。

腰までの黒髪に赤いフェルトのシルクハット、白衣に緋袴の巫女装束。手にした布の包みを琢磨に突き出し、彼女は言った。

「弁当を持ってきたぞ！」

「ちよつと待てどっから来た!？」

「空に決まっておろう。走ってきたのだ」

人差し指を真上に伸ばす神様。

「空つて……走れるもんなのか」

「前に言つたぞ、わしは竜神じゃと。竜は飛ばぬ。雲を踏みしめ空を駆けるものよ。まあ、この辺りは雲が薄かったので無理矢理跳び下りてきたかの」

「……さすが神」

遙か上空を流れる雲を見上げ、つぶやく琢磨。あの高さからここまで落ちてきて五体満足でびんびんしているとは、頑丈にも程がある。

「ところで琢磨、何じゃこの娘は」

あつけにとられたまま固まっている直を目に留め、神様が問う。

「オレの部活のマネージャー……つつつてもわからないか。部活動の手伝いしてくれてるやつだよ」

「ほう。……琢磨がいつも世話になっておるようで。すまぬのう」

「え？ ええと、その、どういたしまして」

神様に頭を下げられ、わけが分からぬままうなずき返す直。

「さて琢磨、弁当じゃ」

「ああ、ありがとう。ホント助かった」

「ちゃんと朱鷺絵の作ったものじゃ。焦げてはおらんぞ」

口調といい、表情といい、神様はどこかすねたような様子だ。

そこで琢磨は気付いた。母が作ったものだから焦げていない、ということとは、今朝の惨状は母以外の誰かの手によるものだということになる。その場にいたのは、母ともう一人。

「……ひよつとして」

神様は目が合ったとたん渋い顔。それが返事のようなものだった。「わし、才能ないかも知れん。神が料理するなど、今まで誰も想像せんかったじゃろうしな」

神様いわく、その存在を構成しているのは人の認識、願いだといふ。ならばなるほど、神様の手料理なんて誰も想像しないだろうから、そういった方面の能力はきつと普通の素人並みになかったのだ。

「わしに不可能があるなど、知らんかった。なかなか衝撃じゃったぞ」

「それで固まってたのか」

「なに、近いうち上達する。待っておれ」

「そ、そうか。うまくいくといいな」

「うむ。朱鷺絵の手ほどきがあるのでな、わしはもう行く。弁当、残すでないぞ」

「冗談。残さねえよ」

「ではな。琢磨、それにまねえじゃあ殿」

「ああ」

「は、はい！」

軽く跳躍したかと思えば、神様はさっき言ったとおり本当に斜め45度で空中を駆け上がった。そのままかなりの速さで遠ざかってゆく。

「結構いいフォームしてるな」

見送りつぶやいた琢磨の腹の虫が、再び空腹を主張する。

「……で、いつまで直立不動なんだお前」

「はわっ!? ご、ごめんなさいっ！」

これまた再び、びく！ と小さく跳ねて、琢磨を見て以来胸元にパンをつかんだまま気を付けの姿勢でいた直が配管の上に座り直す。

「隣いいか。座れそうな場所他にないし」

「はい！ どうぞっ！」

直の隣に腰を下ろし、バンダナで包まれていた弁当の封を解くと、琢磨は両手を合わせた。

「いただきます」

琢磨を見て、直もパンを食べ始める。

もぐもぐと無言。二人分の食べる音だけがしばらく続き、思い出したように直が口を開いた。

「あの、源センパイ」

「何だ」

「今のひとつて、誰なんですか？」

「神様」

「そ、そうなんですか」

その無茶な機動力を見たばかりだ、言葉としてはふざけているが、まさにそれくらいしか形容する言葉が思いつかないし、冗談として突っ込む余地もない。

しかし、訊きたかったのはそういうことではないのだ。

どういう関係なのだろう。とても親しげな様子だったし、源先輩の方も、言葉こそ普段どおりぶつきらぼうだが、自分が見慣れているような突き放した雰囲気はなかった。

それに、お料理を練習してて、すぐうまくなるから待ってて、って。源先輩はその言葉の意味を気にしている様子はなかったけれど、これってつまり、ある意味ピンチ？

「いやいやいや何考えてるのわたし　って、なんでもないですすみませんごめんなさい！」

いつの間にか思ったことが口に出ていて、源先輩の視線が痛い。

別にそんな、先輩とどうにかなろうなんて考えていたわけではなかったけれど。でも、いいところを知っているのは自分だけだと思っていたから、なんだかもやもやする。

「センパイ、その、普段お昼ってどこで食べてるんですか？」

「学食」

「そうですか、ありがとうございます」

今度から、学食で食べようかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780z/>

かみさまといっしょ

2011年12月28日08時48分発行